

—Article—

『風にのってきたメアリー・ポピンズ』における
異なるものとの出逢い

中村 恵

**Begegnung mit einer fremden Daseinsform
in *Mary Poppins* von P. L. Travers**

Megumi NAKAMURA

Osaka University of Pharmaceutical Sciences, 4-20-1 Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan

(Received October 29, 2010; Accepted December 10, 2010)

Der Roman *Mary Poppins* (1934), der von der englischen Schriftstellerin P. L. Travers (1899–1996) geschrieben wurde, ist bisher in zweierlei Weise interpretiert worden: Erstens unter einem mythologischen und zweitens unter einem klassengesellschaftlichen Gesichtspunkt. Und ich möchte dazu einen dritten hinzufügen, nämlich den Aspekt der interkulturellen Begegnung.

Schon bei ihrer Ankunft verblüfft Mary Poppins die Familie Banks, die sie als Kinderpflegerin anstellt, durch ihr seltsames Benehmen: So, als hätte der Wind Mary mitgebracht, fällt sie ganz plötzlich vom Himmel herunter. Nicht auf den Treppen, sondern auf dem Geländer von unten nach oben rutschend gelangt sie in den ersten Stock des Hauses. Und aus ihrer scheinbar leeren Tasche werden verschiedene Dinge des täglichen Lebensbedarfs herausgenommen.

Solche phantasievollen Ereignisse setzen sich eins nach dem anderen fort. Zu einer Zeit taucht Mary in einem Bild auf, um dort mit ihrem Freund Bert einen schönen Nachmittag zu verbringen. Ein anderes Mal besucht Mary mit Jane und Michael — so heißen die Kinder, die Mary pflegen muss — ihren Onkel Herrn Wigg, sie werden von seiner Lachkrankheit angesteckt, und mit dem Lachgas vollgefüllt steigen sie in die Luft, wo sie fröhlich eine Tasse Tee genießen. Mary hat in der Tat viel Umgang. Nicht nur mit einem Hund in ihrer Nachbarschaft, sondern auch mit den Tieren im Zoo, sogar mit einem Stern am Himmel ist sie befreundet. Am Ende tritt eine hochbetagte Frau auf, die eine sehr gute Bekannte von Mary ist und schon bei der Schöpfung der Welt als Erwachsene lebte. Aus dieser Darstellung kann man sich gut vorstellen, dass auch Mary eine der wenigen ist, die aus einer ‚mythischen‘ Welt herkommt.

Bemerkenswert sind bei der Beschreibung der obengenannten Szenen, besonders in den ersten drei Szenen, wo Mary Poppins und die Familie Banks zum ersten Mal miteinander zusammentreffen, mehrere sehr häufig gebrauchte Verben, wie z. B. ‚gaze‘, ‚peer‘, ‚regard‘, ‚stare‘, ‚watch‘ usw. in der Bedeutung von ‚mit offenen Augen betrachten‘ oder ‚starr ansehen‘.

Indem Mary die beiden Kinder, Jane und Michael ansieht, will sie feststellen, ob die Kinder ihres Pflegens wert sind, ob sie die Kinder in ihre ‚mythische‘ Welt mitnehmen kann. Auch die Kinder sehen Mary an, total entsetzt, denn was vor ihren Augen passiert, das ist für sie überhaupt unglaublich und einmalig. Das Wichtigste aber dabei ist, dass Jane und Michael sie schweigend ansehen. Die beiden akzeptieren das seltsame Geschehnis und sagen dazu kein einziges Wort.

Max Picard (1888–1965), der Schweizer Arzt und Kulturphilosoph, schreibt in seinem Buch *Die Welt des Schweigens* (1948) folgendes: „Wenn der Blick des Menschen von der Breite des Schweigens her kommt, bleibt er nicht am Spezialisierten, nicht am bloßen Teil eines Phänomens, haften. [...] Der Blick ... umfaßt die Dinge auch mit dieser Breite.“

Jane und Michael blicken Mary an, indem sie schweigen. Das wäre vielleicht der Grund, warum sie Mary als keine besondere Frau, sondern nur als Frau wie sie ist annehmen.

Interessant genug fehlt dieser Punkt genau *den* Leuten, die Mary nie begegnen wollen. Fräulein Persimmon, die Besitzerin des Gebäudes, wo Marys Onkel Herr Wigg wohnt, ist ein gutes Beispiel. Sie sieht zwar mit ihren Augen, wie Herr Wigg zusammen mit Mary, Jane und Michael in der Luft schwebend ihre Tee trinken, aber ihr Blick kommt eben nicht — wie Picard sagt — von der Breite des Schweigens her, deswegen ignoriert sie immer wieder, was sie erblickt. Sie schließt selbst die Tür zu der phantasievollen ‚mythischen‘ Welt, in die Jane und Michael eingeführt worden sind.

Schweigen ist jene Sphäre, wo Begegnung stattfindet. Mary Poppins begegnet Jane und Michael, und umgekehrt, indem sie mit einem „von der Breite des Schweigens her“ kommenden Blick einander ansehen. Das, so scheint mir, dürfte wahrscheinlich ein unentbehrlicher Schlüssel dazu sein, wie einer fremden Daseinsform zu begegnen ist.

Key words—P. L. Travers; *Mary Poppins*; Kulturbegegnung; Max Picard; das Schweigen

I. はじめに

オーストラリア生まれのイギリス人作家, P. L. トラヴァース (Pamela Lyndon Travers, 1899–1996) は, メアリー・ポピンズを主人公, ないしは題材とした五冊の作品を著しているが,¹⁾『風にのってきたメアリー・ポピンズ』(*Mary Poppins*, 1934)はその一冊目にあたる。内容は, イギリスの典型的なミドル・クラスに属するバンクス家(夫婦, ジェインとマイケル, そしてジョンとバーバラの双子の四人の子供たち)に, ある日所謂 ‘everyday magic’ (‘日常の魔法’²⁾)を使うメアリー・ポピンズがナース(保母)として雇われ, 一家と生活を共にするなかで起こる, あるいは彼女自身の「おとぎのくに」のなかに子供たちを連れて行くことで起こる, 様々な出来事を描いたものである。

この物語に対しては様々な解釈の試みがこれまでされてきたが, そのうちのひとつは, イギリス社会に於けるナースの地位, すなわち雇い主はアッパー・ミドル・クラス以上人間であるが, 自分たちはロウアー・クラスの間人間であるという階級の違い, そしてそこに起因する軋轢に着眼し, それを梃子に物語の本質に迫ろうとするものである。

階級社会イギリスでは, 19世紀半ばから第二次世界大戦初期頃まで, アッパー・ミドル・クラス以上の家庭では, 子供の世話を完全に他人の手に, すなわちナース(保母)あるいはナニー(乳母)という名称で呼ばれたロウアー・クラスの女性たちの手に委ねる風習があった。母性本能はロウアー・クラスの女性たちにこそ強いと長年思われていた事実がその背景にあった。そして子供た

ちは生まれたときから, 家の中の独立空間である子供部屋でナースあるいはナニーと共に生活し, 生活全般に亘る躰を受けた。子供は他人の手で厳しく躰けられ, 苦勞をしないと立派な大人になれないという考えがその背後にあったからである。そういったナースあるいはナニーの担った職能はまさにメアリー・ポピンズのそれと完全に一致する。すなわち彼女はひとりの典型的なナースである。従ってナースの背負っていたあらゆる負の側面, たいへんな任務を背負い, 子供部屋では絶対的権力をもちながらも, 自分は所詮子供たちより階級は下で, 子供たちもそのことを分かっているというジレンマ, また子供たちがある一定の年齢に達し自分のナースとしての役目が終われば去って行かなければならないという覚悟, だからこそ子供たちに感情移入せず一定の距離を置いた付き合いを心掛ける, こういったナース特有の悲しい側面をもまたメアリー・ポピンズはもちあわせている。新井潤美はその著『不機嫌なメアリー・ポピンズ』のなかで, そういった階級差に由来する心的状態ないし心的態度がメアリー・ポピンズという一女性の特性を成していることを指摘している。³⁾もうひとつの解釈は, この物語のもつ神話的, また妖精物語的側面に注目したものである。トラヴァースはエッセイ「ただ結びつけることさえすれば」(*Only Connect*, 1969)のなかで, 「妖精物語は時間と場所のなかに落下してきた神話である」⁴⁾と述べているが, 両者は彼女にとって密接に関連し合っている。森恵子は論文「メアリー・ポピンズの正体」のなかで, 空に星をはりつける「コリーおばさん」の章, 生命の始まりを扱った「ジョンとバーバラの物語」の章, メアリー・ポピンズが「西風」にのって去って

いく章などに神話的要素を, また星が角に突き刺さって踊ることを止められない牛を扱った「踊る牝牛」の章などに妖精物語的要素を見出し, そのことを中軸に『風にのってきたメアリー・ポピンズ』の解釈を試みている。⁵⁾

そして筆者は上述の二通りの解釈を視野に入れつつも, それらとは少し違う視点から, すなわち, 典型的なミドル・クラスに属するバンクス家の人たちが, 自分たちとは全く異なる存在であり, 自分たちの常識を根底から覆すメアリー・ポピンズという存在に如何にして出逢うかという視点から, そしてメアリー・ポピンズの側からも, 自らの特異性を不可思議ならざるものとして, 如何にしてバンクス家の人たちに知らしめていくのかという視点から, 換言すれば「異なるものとの出逢い」というキーワードでこの物語を読み解いてみたいと思う。

II. P. L. トラヴァースについて

しかしその前に作者のP. L. トラヴァースについて概略的なことを記しておきたい。彼女は1899年にオーストラリアのクイーンズランドで, アイルランド人の父親ロバート(Robert)とスコットランド人の母親マーガレット(Margaret)の間に生まれた。家の前には2,000 kmに及ぶサンゴ礁が広がり, 後は果てしなく続くサトウキビ畑という, たいへん自然に恵まれた環境の中で育ち, 父方がケルト系ということもあり, ケルト民族の伝承, 古い妖精物語に幼少時より親しみ, 空想に耽るのを好んだそうである。6歳のころより詩や物語を書くが, 女優としてシェイクスピア劇の舞台に立つ経験を経て, 1924年にイギリスに移ってからは文筆業一本で生きてゆく決意をし, 所謂『メ

1) *Mary Poppins*, 1934. *Mary Poppins Comes Back*, 1935. *Mary Poppins Opens the Door*, 1943. *Mary Poppins in the Park*, 1952. *Mary Poppins in Cherry Tree Lane*, 1982. の五冊。

2) 子供たちの日常生活の中にあられる魔法のことで, その技法は児童文学の世界で古くから活用されていたが, イーデス・ネズビット Edith Nesbit (1858–1924) がジャンルとして確立させた。熊倉晴美「旅するメアリー・ポピンズ」, 大妻女子大学英文学会『大妻レビュー』第38号(2005年), 163ページ, 167ページに詳しく述べられている。

3) 新井潤美『不機嫌なメアリー・ポピンズ』平凡社 2005年, 76–93ページ。

4) イーゴフ, スタプス, アシュレイ編『オンリー・コネクトII』猪熊葉子, 清水真砂子, 渡辺茂男訳, 岩波書店 1979年, 145ページ。

5) 森恵子「メアリー・ポピンズの正体」, 世界文学研究会『世界文学』第99号(2004年), 23–31ページ。

アリー・ポピンズ』シリーズを著す他、ジャーナリスト、作家として幅広く活躍し、1996年に97歳で亡くなっている⁶⁾。

トラヴァースは「メアリー・ポピンズは、私を喜ばせるために、自分から私のところへ来てくれたのです。私がメアリー・ポピンズを創り出したなどと思ったことはありません⁷⁾」と述べているが、「神話は創られたものではなく、呼び出されたものである⁸⁾」と言明しているトラヴァースにとって、メアリー・ポピンズはまさに「神話と同じ無の泉から生まれてきたもの⁹⁾」であり、あるいは時と場所の枷が嵌められた神話、すなわち「妖精物語と同じ世界から出現¹⁰⁾」したものである。豊かな自然に囲まれ、ケルトの妖精物語に傾倒し幼少時代を過ごしたトラヴァースは、そのようなメアリー・ポピンズと出逢う素地を十二分に有していたのであり、従ってその出逢いは何ら困難を伴うものでなかったことは想像に難くない。しかし桜町通り17番地のバンクス家の人々にとってそれはひとつの大きな出来事、いや大事件であった。

III. バンクス家の人たちの常識を覆す存在

バンクス家の人たちがメアリー・ポピンズという人物にどのように出逢っていったかを物語の流れに沿って検証する前に、彼女の存在自体がバンクス家の人たちの常識を如何に覆すものであったかを再確認したい。

まずその登場の仕方からしてひじょうにユニークで型破りである。「門のところへまるでぶつかりそうにあらわれた人影」(MP15)が、「風に揺

すられて、身を屈めて門の掛金を上げ」、「門を入ると、いきなり風で空中に持ち上げられて、家のところまで吹きつけられたように見え」、「その人が地面に着いた時家中が揺れた」(MP16)のであった。そして保証人のことを口に出したバンクス夫人に対して「たいへん旧式です。時代遅れと申してもよろしいでしょう」(MP18)と即座にその申し出を却下し、保証人を立てず、その身ひとつをもってナース(保母)としてバンクス家に就職する。子供部屋のある二階に上がる時には、「階段の手摺の上を、上の方へすっと滑り上がった」(MP18-19)のである。そして何より今までのナースと異なっていた点は、雇い主はバンクス家、メアリー・ポピンズは保母として雇われてる身であるのにも拘わらず、マイケルに「僕らでいいですか」(MP19)という質問を発せしめるほど、その立場を逆転させる威厳をどこか備えていることである。子供部屋のなかでは空っぽに見えた鞆のなかから次から次へとメアリー・ポピンズの生活用品が取り出される。寝る前に飲まされるシロップは、同じ瓶から注がれたものであっても、飲む人によって味が異なる。

第二章の「外出日」では、「二週間おきの木曜日、二時から五時まで」(MP26)と定められている外出日を、「上流の人たちの家庭では、一週おきの木曜日、一時から六時」(MP26)であることを根拠に、彼女を説き伏せ、自分の要求を通す。メアリーは友人のマッチ売りのパートと、彼が舗道上に描いた絵の中に入り、そこでのデートを楽しむ。どこに行ってきたのと尋ねるジェインとマイケルに対し「おとぎのくに」(MP37)とだけ答える。

シンデレラやロビンソン・クルーソーがいるところだけがおとぎのくにではなく、「だれもが自分だけのおとぎのくにを持っている」(MP38)ことを、そんなことも知らないのかといった高飛車な調子でメアリーは返答として言い放つ。

第三章の「笑いガス」では、メアリー・ポピンズと上の二人の子供たちが、メアリーのおじ、アルバート・ウィッグさんを訪問する。彼は普段から陽気な人で、可笑しなことを見つけ出しては四六時中笑ってばかりいるが、彼らが訪問した日は、おじさんの誕生日が金曜日と重なる特別な日で、その日には少しでも笑うと笑いガスがおじさんの体内に充満し、彼は空中に舞い上がってしまう。子供たちもその笑いに感染し床から上がり、メアリーも一緒になって、皆で空中に浮かびながらお茶をする。

第四章の「ラクお婆さんの犬」では、メアリー・ポピンズはラクお婆さんの飼い犬アンドリューと話をする。

第五章では、I.で触れた「踊る牝牛」の物語がメアリーによって語られるが、その牝牛がメアリーの母親の友人であったというから驚きである。しかも失った星を探し求めて、ロンドンの桜町通りを牛が歩くというのだから、二倍の驚きを与える。

第六章の「わるい火曜日」では、道に落ちていた磁石を使って、メアリーと子供たちは世界旅行をする。

第七章の「鳥のお婆さん」では、聖ポール寺院の前で鳥たちにパン屑をあげているお婆さんが描かれる。お婆さんはまるで鳥たちの母親のよう。しかしメアリーは何故かそこに集まる鳥たちに辛く当たり、優しくない。

第八章の「コリーお婆さん」では、メアリーは子供たちと買い物に出かけるが、必要以上の会話を要求する肉屋や、メアリーのお洒落にまっ

たく気を留めない魚屋に腹立たしい思いを抱いたのち、世界が創造されたときゆうに二十歳を超えていたというコリーお婆さんの店にジンジャー・パンを買いに行く。お婆さんの指は折り取ると飴になり、また別の指がすぐに生えてくる。飴の味は日によって異なり、本人にも予想できない。I.で述べたように、ジンジャー・パンに付いている紙の星を、お婆さんは夜になると二人の娘やメアリーと一緒に空に貼り付ける。

第九章の「ジョンとバーバラの物語」では、一歳の誕生日を迎えた途端ムクドリと話ができなくなる双子のジョンとバーバラの様子が描かれる。ムクドリはそのことを悲しく思い、メアリーはそんなムクドリに心を寄せる。

第十章の「満月」では、メアリーの誕生日が満月と重なったある夜、動物園の動物たちが檻から出て彼女の誕生日を祝う。「小さい動物は大きい動物を怖がらないし、大きい動物は小さい動物を守ってやる」(MP184)様子は、宇宙平和の到来を謳ったと言われる、旧約聖書のイザヤ書第11章6節から9節を想起させる¹¹⁾。

第十一章の「クリスマスの買い物」では、メアリー・ポピンズと一緒にクリスマスの買い物に出かけたジェインとマイケルが、同じくクリスマスの買い物に来ていたプレアディス星座のマイアに偶然出くわす。

第十二章の「西風」では、春になり風向きが変わったある日、メアリー・ポピンズは西風によってバンクス家を去っていく。

日常生活のなかに魔法が入り込む‘everyday magic’の手法を用いて書かれた作品だけあって、これらのことは、そこに巻き込まれた四人の子供たちを始めとするバンクス家の人たちにとって、まさに青天の霹靂であったに違いない。ただ、風に吹きつけられ玄関のドアに叩きつけられる、階段の手摺りを下から上へと滑るように上る、空っ

6) P.L.トラヴァース『風にのってきたメアリー・ポピンズ』林容吉訳、岩波書店 1988年、225-228ページ。梶原行子「児童文学に見られる人間像〈メアリー・ポピンズの場合〉」、和歌山信愛女子短期大学『信愛紀要』第27号(1987年)、1ページ。前掲「旅するメアリー・ポピンズ」164ページ等を参照させていただいた。

7) 前掲『風にのってきたメアリー・ポピンズ』228ページ。

8) 前掲『オンリー・コネクトII』145ページ。

9) 前掲『風にのってきたメアリー・ポピンズ』230ページ。

10) 前掲『オンリー・コネクトII』142ページ。

11) 『聖書 新共同訳』日本聖書協会 1992年、(旧)1078ページ。

ぼの鞆の中から次から次へと日用品が出てくる、これくらいのことならば、眼の錯覚としてそのように見えた、そしてそれを多少なりとも誇張して叙述した、ということは大いにあり得るであろう。体重が軽ければ、強い風に煽られて運ばれたように見えたとしても、それは何ら不思議なことではなかったであろう。身軽な人が難なく階段を上っていけば、特に鞆等を手摺りに載せて上っていけば、その人自身が手摺りを下から上に上っているように見えることもあったであろう。また余にも生理整頓の良い人の鞆から、次から次へと様々な品が取り出されるのを目にすると、一体どこにこんなにたくさんの物が収納されていたのかと訝しく思うことも大いにあり得たであろう。しかし、天地創造の時にはすでに成人に達していたというおばあさんと一緒に紙の星を夜空に貼り付けたり、夜中の動物園で獰猛な動物たちが柔和になり、メアリー・ポピンズの誕生日を祝うために皆一丸となって彼女の周りに集まって来る場面などに至っては、この 'everyday magic' は錯覚による代物などでは決してなく、また小手先の魔法でもさらさらなく、トラヴァース自身がメアリー・ポピンズについて「神話と同じ無の泉から生まれてきたもの⁹⁾」と言っているように、宇宙的な広がりをもつ、神話世界に深く根ざしているものであることが、読者に明らかになる。そしてメアリーが保証人のことや外出日のことで雇い主であるバンクス夫人に対して自分の主張を臆することなく述べ、堂々と渡り合えるのも、彼女が単に自意識の強い女性であるからだけではなく、神話世界からやって来て、そこに存在基盤を置いていることが彼女自身のプライドとなっているからである。意識のなかでは階級に縛られていない、ある意味、階級そのものを超越してしまっているからである。このように神話世界に属しているというプライドが彼女の自意識を支えている。

しかしこの拙論では、その方面での考察はこれくらいにしておいて、今後は、そのようなメア

リー・ポピンズがバンクス家の人たちと如何にして出逢っていったかということに焦点を絞り、論を進めてゆきたい。

IV. メアリー・ポピンズとバンクス家の人たちの出逢い

メアリー・ポピンズとバンクス家の人たちが如何にして出逢ったかを物語の流れに即して考察していくとき、「見る」、特に「じっと見つめる、凝視する」といった日本語に相当する英語の動詞が、メアリー・ポピンズの側からも、バンクス家の人たちの側からも、実に多く用いられていることに気づかされる。幾つか例を挙げてみよう。

子供たちの世話をしていたケティばあやが辞めていったあと、困り果てたバンクス夫人は新聞に求人広告を出す。どんな人が面接に訪れるのかと窓から街路を見ているジェインとマイケルはこの時すでに、“watched (じっと見ていた)” (MP16) のである。そしてⅢ. で述べたように、尋常ならざるやり方でメアリー・ポピンズがバンクス家に到着したとき、ジェインはマイケルの腕をつかみ、“Let's go and see who it is! (行って誰なのか見てみましょうよ)” (MP16) と言っている。‘see’ には「見ようと思わなくても視界に入ってくる」という意味もあるが、それ以外に「確かめる、調べる、検分する」という意味もある。ここでは後者である。‘watch’ ほど「じっと見つめる」といった意味合いは乏しいが、それでも新しくやって来た人物に対し大いに興味をそそられ、従って心を開いている様子がこの表現から窺われる。そして“Jane and Michael could see that the newcomer had shiny black hair [...] and that she was thin, with large feet and hands, and small, rather peering blue eyes. (ジェインとマイケルには、新しくやって来た人は艶々した黒髪の人だということ、そして痩せていて、手足が大きく、小さくて、見つめるような青い目をしているということが、分かり

ました。)” (MP16) とある。ここで用いられている ‘see’ は「分かる、理解する、気づく」という意味だから、ジェインとマイケルのメアリー・ポピンズに対する興味がなお持続していることが読み取れる。そして何よりも注目すべきは、メアリー・ポピンズの目が“peering (じっと見ている、見つめている)” だったことである。これは、メアリー・ポピンズの側からも、彼女がこれから引き受ける子供たちが、彼女が属している神話世界に果たして馴染める人間であるかどうか、それを理解できる人間であるかどうかを検分しようとしていることの表れとして捉えることができるだろう。

バンクス夫人が保証人のことを話題にした時、メアリーは自分は保証人を立てないことにしているのだと毅然と言い放つが、その後で“Mrs. Banks stared. (バンクス夫人はじっと見つめました。)” (MP18) という文が続く。バンクス夫人はこの時初めて、これから採用しようとしている人が只者でないということに気づき、驚きの気持ちで、どういった人物であるかを見極めたい気持ちで、‘stared (じっと見つめた)’ のではなかっただろうか。

メアリーが階段の手摺を滑るように上がってきた時も、バンクス夫人は喋りっぱなしだったので、全くそのことに気づかなかったが、ジェインとマイケルは先に二階に上がっていて、“watching from the top landing (踊り場から目を凝らして眺めていたので)” (MP18) その様子をすっかり見届けることができた。そして“‘They gazed curiously at the strange new visitor. (子供たちは、新しくやって来た不思議な人を、興味深々といった様子で、穴のあくほど見つめました。)’” (MP19) ジェインとマイケルは、自分たちの常識を覆すようなことをやってのけるメアリーに対し、驚愕の気持ちを抱きつつも、そこから目を離さず、そんな人物の正体を自分たちなりに理解しようと努めているのであるが、その様子がここから読み取れるように思う。子供たちのそういった心的態度がこの

‘gaze (興味・驚きをもって見つめる)’ という動詞に表現されている。

子供部屋に通され、ジェインとマイケル、そして双子のジョンとバーバラの四人の子供たちをバンクス夫人から紹介されたあと、“Mary Poppins regarded them steadily, looking from one to the other as though she were making up her mind whether she liked them or not. (メアリー・ポピンズはみんなをじっと見ました。順々に、ひとりずつ見てゆきながら、好きになろうかなるまいかと、心を決めようとしているふうでした。)” (MP19) さきほどの、現在分詞形で用いられた ‘peer’ という動詞と近似の意味をもつ、‘regard (見つめる、凝視する)’ という動詞が、ここでは用いられている。この動詞は、そのすぐ後の文、“Mary Poppins continued to regard the four children searchingly. (メアリー・ポピンズは探るよう目付きで四人の子供たちを見つめ続けた。)” (MP19) のなかにも再び登場する。メアリー・ポピンズは子供たちを見つめ続けた、凝視し続けた、これは、子供たちが神話世界からやってきた自分にある種の魅力を感じ、懐いてくれるかどうか、そしてそもそもこの仕事は神話的バックグラウンドをもつ自分にとって引き受ける価値のあるものなのかどうかということを見極めるため、換言すれば試験官のような心持ちで子供たちを検分していた、と筆者には思われる。その結果分かったことは、メアリー・ポピンズをじっと見続ける子供たちの視線は、この段階ではまだ興味本位なものに過ぎなかったけれども、メアリーの側から彼らを凝視すると、そこには彼らが自分に対し心を開いている様子が伺い知れたのである。バンクス家の子供たちはメアリーから及第点を貰い、試験に合格し、メアリーはナースの職を引き受ける決意をする。ここで特筆すべきは、形式的に言えば雇用主はバンクス家、メアリー・ポピンズは被雇用者であるのだが、実質的には両者の関係が逆転していることである。その裏付けとなっているのは、マイケ

ルが「僕らでいいの？」(MP19)という質問を発し、バンクス夫人の怒りを買うことや、バンクス夫人があとになって夫のバンクス氏に「それこそ、まるで私たちにとってたいへん名誉になるとでもいうようでしたよ」(MP19-20)とメアリーが職を引き受けた時の様子を報告していること等である。

そしてその後も子供たち、そしてメアリーの両者の側からの「見つめる、凝視する」という視線による動作は続く。ただ「見つめる」という動作のもつ意味合いは両者で少し異なってくるようである。子供たちの側からはとにかく驚きの気持ちで「見つめる」のである。何も入っていないように見えた鞆から様々な生活用品が出てくるのを目にして、“Jane and Michael stared. (ジェインとマイケルは目を睜りました.)” (MP21) 寝る前に薬のようなものを飲まされそうになった時には、“Michel stared. (マイケルは目を丸くしました.)”そしてその寝る前の薬のようなものは、飲む人によって味が異なって、メアリー・ポピンズが飲むとラム・パンチの味がすることが分った時、“Jane's eyes and Michael's popped with astonishment [...] (ジェインとマイケルは驚きのあまり目の玉が飛び出しそうでした.)” (MP23) そして子供たちは驚異をもってメアリーのすること・為すことを見つめながらも、その世界が素晴らしいものであることに充分に気づいている。だからこそ「二人とも桜町通り 17 番地に何かしら奇妙な、でも素敵で素晴らしいことが起こったことは、よく分かっていたのです。」(MP23)

一方そんな子供たちに向けられたメアリーの側からの視線、「見つめる」という動作には、何か抗うことの許されない、絶対服従の命令のようなものが含まれているように思われる。寝る前の薬のようなものをメアリー・ポピンズが双子の赤ん坊にも飲ませようとする時、ジェインは小さい子供には良くないことだと言い、メアリーを止めようとするのだが、“Mary Poppins, however, took

no notice, but with a warning, terrible glance at Jane, tipped the spoon towards John's mouth. (それでもメアリー・ポピンズは、そんなことにはお構いもなく、恐ろしい目付きでチラッとジェインを眺めながら、スプーンをジョンの口の方にもってゆきました.)”(MP22) またマイケルがメアリー・ポピンズには自分たちの許にずっといて欲しいという願いを口にした時、“Mary Poppins stared from him to Jane in silence. (メアリー・ポピンズはじっと見つめるようなその視線を、黙ったまま、マイケルからジェインの方へと移しました.)”(MP24) これらの文に見られる、メアリー・ポピンズの有無を言わせぬ厳しい視線は、しかしながら決して権威主義的な意味での服従を子供たちに強いるものではなく、その峻厳とも思える態度の裏には、神話世界の常識のようなものを弥が上にも子供たちに突き付け、それに多少なりとも馴染んでもらいたいというある種の親心のようなものが、子供たちを強引に自分の世界の方向に引っ張ってゆこうとする、ある種の彼女なりの愛情のようなものが潜んでいる、と筆者には思える。兎にも角にもバンクス家でのメアリー・ポピンズの生活はこのようにして始まった。

V. メアリー・ポピンズに出逢わない人

『風にのってきたメアリー・ポピンズ』の中では、誰もがメアリーという人物に真の意味で出逢う訳ではない。同じ場に居合わせて、メアリーの姿が目に入っている、彼女と出逢うことを頑強に拒む人もいる。第三章の「笑いガス」に登場する、メアリーのおじ、アルバート・ウィッグさんが住んでいる家の大家、ミス・パーシモンがそうである。彼女がメアリーの存在を受け入れない様子を、その場面を描写するのに用いられている動詞を詳細に検討することを通して明らかにしたい。

ウィッグさん、彼の笑いガスに感染したジェインとマイケル、そして笑いガスなしに、自分の意

志だけで空中に浮かぶことのできるメアリー・ポピンズ、この四人が天井近くまでバウンドしながら飛び上がり、同じく空中に浮かんだテーブルを囲んでお茶をしている時、お湯が入用だろうと気を利かせて入ってきたパーシモンさんは、部屋の床の上に誰もいないのに気づくと、“[...] she began, looking searchingly round the room, [...]. (彼女は部屋の中を見回しながら言い始めました.)”(MP51-52) パーシモンさんの視線は特定の対象を捉えることができず、「部屋の中を見回した」のである。彼女の視線はその向かう先が確定されていないという点において不安定なのである。彼女がそもそもこの場に参加すべく招かれた人間でないことがこの箇所から窺える。その後彼女は空に浮かんでいる四人を発見するのだが、その時の状況は “[...]she caught sight of them all seated on the air round the table. (彼女は皆が空中に上がってテーブルを囲んでいるのを見ました.)”(MP52) と記されている。この ‘catch sight of ~ (～を見る)’ という表現だが、これはすぐ直前の箇所、ウィッグさんが可笑しくて可笑しくてクツクツ笑い出すのだが、“[...]he caught sight of Mary Poppins face and stopped the chuckle[...] (メアリー・ポピンズの顔を見ると、笑いを止めました)” (MP43) という場面でも用いられている。この場面では ‘catch sight of’ のあとは名詞、しかも「メアリー・ポピンズの顔」という固有名詞となっていることから、ウィッグさんのこの時の視線は特定のものに向けられていることが読み取れるが、パーシモンさんが “caught sight of them (彼らを見た)” と書かれている箇所では、‘catch sight of’ の目的語は複数の代名詞 them であることからして、この時の彼女の視線はどこか漠然としていて、ある特定のものに釘付けされたものではない、従って対象物を深く見極めようとする視線ではないものであることが分かる。そしてパーシモンさんはその光景に驚くが、その驚きを沈黙のうちに受け止めずに、目の前で起こっているこ

とを否定し、認めまいとする発言が、それに続く。“Well, I never! I simply never! [...] Such goings on I never did see! In all my born days I never saw such. (まあとんでもない！何てことなんでしょう！ [...] こんなことが起こっているのって、これまで一度だって見たことはありません。生まれてこのかたこんなことは一度だって見たことはございませんよ！)” (MP52) パーシモンさんにとって何かを受容する際その基準となるのは、自分自身のこれまでの経験である。今までに見たことがあるか、聞いたことがあるか、わが身に体験したことがあるか、そういうことに照らし合わせて物事の可否を決定する。彼女は自分の今までの経験を基にひとつの確固たる世界を作り上げてしまっている。それは多かれ少なかれ誰にでも当てはまることなのだが、彼女の場合問題となるのは、自分の世界の範疇に収まりきらないものは決して受け入れようとしなないということである。ウィッグさん、そしてメアリー・ポピンズは彼女にとってまさにそのような範疇の外に位置する代物なのであった。

ジェインとマイケル、そしてバンクス氏や夫人も初めはメアリー・ポピンズの言動に途轍もなく驚いた。そして彼らにそのような驚きをもたらしたメアリー・ポピンズを「凝視した」、あるいは「穴のあくほど見つめた」。しかし彼らがパーシモンさんと異なるただひとつの点は、その驚くべき出来事を否定するような言葉はひとつも発しなかった、そしてメアリー・ポピンズの毅然とし態度に打ち負かされ、その驚きを沈黙の裡に受け止めた、ということであろう。例を挙げてみよう。メアリー・ポピンズが風に吹きつけられるようにバンクス家にやって来る様子を二階の窓のところで見つめていたジェインとマイケルだったが、メアリーが子供部屋に上がってきた時、「どうやって来たの。風にのってきたように見えただけ」(MP20) と尋ねるジェインに対して、「そうです」(MP20) とだけ短く答えるメアリー・ポピン

ズであった。子供の好奇心から言うと、どうしてそんなことができたのかとか、自分にもそれは可能であるのか、などといったことについて質問したいのは山々であったであろうに、メアリー・ポピンズが物を言ったその様子から、それ以上何も言わない方が賢明だと悟ったのあろうか、そのことに関する会話はそれ以上続けられることはなく、そこで終えられている。またメアリーが階段の手摺を下から上に逆さに上ってきた時も、ジェインとマイケルはそんなことをやってのけるメアリー・ポピンズを「穴のあくほど見つめた」(MP19)のであったが、そんなことはあり得ないとか、何か仕掛けがあるに違いないとか言って騒ぎ立てることは一切せず、その不思議な出来事を、驚きつつもただ沈黙の裡に静かに受け止めている。

スイスの精神病理学者であり、思想家のマックス・ピカート (Max Picard, 1888-1965) は、その著『沈黙の世界』(Die Welt des Schweigens, 1948) の中で、「人間の眼差しが広大な沈黙から出発する場合には、その眼差しは特殊化されたものや、一個の現象の単なる一部分にこだわったままではない¹²⁾」と述べているが、ジェインとマイケルを始めとするバンクスの人たちは、メアリー・ポピンズがもたらした驚きに満ちた出来事を、あれやこれやと抗弁せずに、ただただ沈黙の裡に受け止めたことは上に述べたが、彼らはまさにそのことによってメアリー・ポピンズの特異性に拘泥することはなかった。換言すれば自分たちと異なるところのある、少し変わった女性として彼女を捉えることはなかった。そしてピカートが「沈黙の広大な基盤から発する眼差しは、¹³⁾ またもろもろの事物をこの広さでもって包摂する」とも述べているように、彼らは沈黙に由来するその眼差しで、メアリーをその特異性においてのみならず、その存在そのものを丸ごとあるがままに受け入れることができた。驚きを沈黙の裡に静かに受け止

めること、これこそがメアリー・ポピンズの不思議な「おとぎのくに」(MP37)への招待状を受け取ることが許される、一種の資格のようなものではないか。少なくとも筆者にはそう思える。

VI. おわりに

メアリー・ポピンズは桜町通り 17 番地のバンクス家にやってきたが、これが他の家庭であったのなら、例えば同じく桜町通りに位置するブーム提督の家とか、ラークおばさんの家とかであったのなら、仮にその家でナースを募集することがあったにしても、彼女はやって来なかったに違いない。すなわち、典型的なミドル・クラスの家の中でも、四人の子供たちがいるということはこの際度外視しても、何故メアリー・ポピンズは選りによってバンクス一家のところにやって来たのか。この問いを最後にここで立てたい。

それに答えるために、まずブーム提督の家、そしてラークおばさんの家が外見上どのような様相を呈しているかということをも物語に即して見てみよう。ブーム提督の家は、桜町通りで一番大きく、一艘の船のように作り上げられていて、屋根の上の風見は望遠鏡の形で、庭には旗竿が立てられている、そして通りの人たちはその家をとて自慢に思っていた、と記されている。ラークおばさんの家は、通りで一番ではないにせよ、ひじょうに大きな家で、門が、友人や親戚用のと、肉屋、パン屋、そして牛乳屋用のとの二つあり、友人用の門から間違って入ってきたパン屋がかつてひどく叱られたことがあったということである。またおばさんはアクセサリー類をしこたま身につけていて、歩くとガチャガチャ音がして、ラークおばさんがやって来たことが近所の人たちにはすぐに分かった、と記されている。おばさんの愛犬アンドリューは、外套を何枚も持ってい

て、一週間に二回トリミングに連れて行ってもらい、そのほかにも、普通の人なら誕生日にしかしてもらえないような贅沢を、日々味わわせてもらっている犬だということである。要するにブーム提督もラークおばさんも、ある意味大金持ちのミドル・クラスの人たちで、そのクラスでの足場が危なげなくしつかりと定められているとすることができよう。それに対してバンクス一家の家は、桜町通りで一番小さくて、その一軒だけが古ぼけていて、ペンキを塗りなおしたほうがよいような家である、と物語の最初に記されている。そしてその理由は、綺麗で住みよい家と四人の子供たちのどちらを選ぶかと夫から迫られた時、バンクス夫人は考えた末子供たちを選んだから、ということである。ミドル・クラスに属している人間として住居としての家の外観を整えたいという自負心はバンクス夫妻にも多かれ少なかれあったと思うが、そういった自負心よりも、彼らは四人の子供たちという掛け替えのない命を選んだ。そこには、ミドル・クラスに属していながらどこかその枠内に収まりきれない、どこか飛び出たところのある一家の様子が、だからこそミドル・クラスの規範といったものに厳しく縛られていない、したがって他の世界に通じる可能性のある隙のようなものをどこかにもっている一家の様子が伺い知れるように、筆者には思える。そんなバンクス一家であったからこそ、彼らとメアリー・ポピンズの出逢いは可能だったのではないか。

沈黙の裡にお互い見つめあうことで出逢っていったメアリー・ポピンズとバンクス一家。ここには私たちが異なるものと出逢う際に、忘れてはならない、ひじょうに大切な鍵が秘められているように思える。

テキスト

P. L. Travers: *Mary Poppins*. London, Revised edition 1982. 引用に際しては、MPと略記し、その後ページ数をアラビア数字で記した。日本語訳に関しては、『風にのってきたメアリー・ポピンズ』

林容吉訳、岩波書店 1988 年。を参考にさせていただいた。

REFERENCE

小稲義男他編『研究社新英和大辞典』研究社 1989.

12) Max Picard: *Die Welt des Schweigens*. Zürich, 3. Auflage 1959, 70 ページ。日本語訳に関しては、『沈黙の世界』佐野利勝訳、みすず書房 1980 年。を参考にさせていただいた。

13) 前掲 *Die Welt des Schweigens*, 77 ページ。